



ご挨拶 「芹沢光治良ノート(5)」の発行

代表理事 勝呂奏

この一文を書いている昨日は、出先で桜吹雪を浴びて歩くことになった。降り注ぐ光も眩しく、歩みの周囲を風に流れる桜の花弁が渦を巻いている。このようなことは幾度もあったように思うが、具体的に記憶しているわけではない。それを心もとなく思う一方、忘れていたから美しい経験をしたとも言えそうである。覚えがいいというのも、何も褒められたばかりのことではないかも知れない。

そんなことを思ったのは、これも読書の経験に通じるところがあるからだろう。文学の研究者を肩書にするように、日頃から探究的に読むことをしている。それはそれで意味のあることではあるが、正直に告白するなら、それには苦い感想が貼り付いている。作品の読みが深まれば深まるほど、素朴な感動から遠ざけられているように思えてくることがあるのだ。自分の手で折角の感動を台無しにしている成り行きで、それならば研究をやめればいいだろうとの声が聞こえてくるが、そうもいかない。そこに僕の悩みはあって、作品を前に「これはいいねえ」と讃嘆を洩らしながら、一方で探究的に読むことを続けている。

文学一般のことを書いたが、このことは芹沢光治良の読む場合も同じである。それも研究者が読む場合に限らず、愛読者の場合においてもである。芹沢の作品を読む感動を大切にしたいし、深く理解もしたいと思うと、ここに書いたことが当てはまることもあるだろう。

当財団で作成する『芹沢光治良ノート』は、編集諸氏の献身的な尽力で発行を続け、今回『サムライの末裔』を取り上げて五冊目を数える。広島原爆の悲惨さを扱ったもので、戦後八十年の年に相応しい企画である。この『サムライの末裔』についても、僕は先に書いたような悩みを経験したことがある。編集諸氏にもそのような思いの掠める一瞬があったかも知れない。ここにそのご苦労に謝しつつ、皆様の手元で『サムライの末裔』と共に開かれることを望んでいる。

最後にその参考という意味で、かつて拙論に引用した芹沢光治良のエッセイ「一つの世界」を希望して(昭和30年11月『リーダーズダイジェスト』)の一節を挙げておこう。

(略) 寄港する空港ではどこでも、パスポートの点検があって、人類が多くの人にわかれていて、痛感させられる。言葉のちがひ、皮膚の色のちがひ、使う貨幣のちがひ、いやになるほど知らされる。そればかりではなく、国と国との間に、闘争があって、そのために、人間同士が同じ人間だということさえ理解しないような場合にさへぶつかる。

それにしても、人類が同じ地球に住む一種族だという認識によって、人類が一つになって、あらゆる民族が扶けあわなければならない時代になったのではなからうか。国家間の闘争が、原子力の発明で、人類の破滅を持ち来たことをここで持ち出すまでもなく、交通の発達によって、地球がこんなに狭くなってみると、人間があわれな存在であることもわかり、すべての民族が平和に繁栄することが、自国が平和に繁栄するのに必要であることもわかるはずである。

各民族が理解しあうことが、それには第一条件であるが、理解しあうということが、どんなにむずかしいか。(略) それ故、私は日本を世界に識ってもらい、世界平和に資するために、これから次々にフランスで小説を発表するつもりである(略)。

事務局より報告

■2024年度を振り返って

- ①『芹沢光治良ノート(4)』発行 (2024年5月)
- ②『財団ニュース(10)』発行 (2024年12月)
- ③『芹沢光治良と音楽と・講演と歌の調べ』 (2024年6月22日)
 - ・講演者: 豊田英文 (芹沢光治良文学愛好会代表)
 - ・歌の調べ 野田ヒロ子 (藤原歌劇団団員)
- ④『芹沢光治良作品“神の微笑”』朗読会 (2024年12月15日)
 - ・朗読者 難波 善明 大前 洋子「劇団じゃけん団員」
- ⑤『芹沢光治良と軽井沢文学』講演会 (2025年3月29日)
 - ・講演者 大藤敏行 (軽井沢高原文庫館長)



■2025年度の行事計画

「主な行事」

- 『芹沢光治良ノート(6)』『財団ニュース(12月)』の発行
 - 活動内容
芹沢光治良に関して、幅広い年齢層の方に知っていただき、興味を持っていただくための『芹沢光治良ノート』及び『財団ニュース』を刊行し、芹沢光治良の意思を後世に継承する。
- 講演会・音楽会の開催
 - 活動内容
代表作である『人間の運命』『神シリーズ』を中心に、芹沢文学を多くの方に広める講演会・音楽会を開催する。
 - 活動時期 2025年度に3回実施予定。(5月、12月、3月)
 - 活動場所 サロンマグノリアを中心に行う。
※ 2025年5月31日(土)
『芹沢光治良とフランス文学—ジッドを始めとする文学者たち』講演会
・講演者 勝呂 奏
- 財団ホームページの運営と電子書籍を若者にアピールする。
・昨年(12月)に電子書籍化された「神の微笑」や「サムライの末裔」、「ブルジョア」など10作品がスマホやパソコンで読めることをアピールする。
- 全国の“芹沢文学愛読者の会”の皆さんと協力して芹沢文学をひろめる活動をする。

『芹沢光治良ノート(5)』の紹介

芹沢光治良の作品に、まだ出会っていない人たちに芹沢作品を紹介する小さな冊子です。
この冊子を家族、身近な知人、友人にお伝えください。

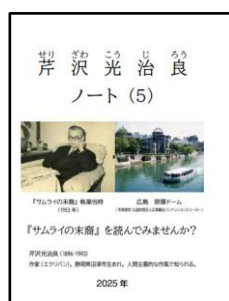
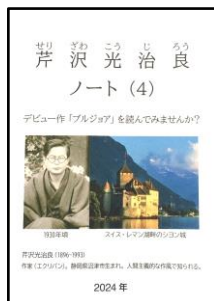
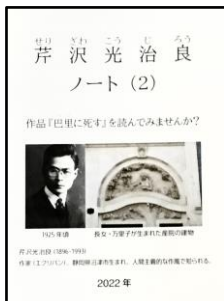
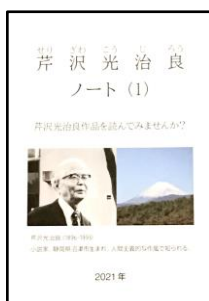
■「サムライの末裔」の紹介 (2025年5月発行)

・本年(2025年)は、戦後80年の節目の年を迎えました。今回の作品は、広島市に投下された原爆の恐ろしさと敗戦後を生きた日本人を描いた「サムライの末裔」を紹介しています。

歴史を風化させず、平和を願い、未来に向けて行動をしていくためにも、本作品をお読みいただければ幸いです。【あとがき】より

- 芹沢光治良ノート(1)『完全版 人間の運命・父と子』
- ノート(2)『巴里に死す』
- ノート(3)『孤絶』
- ノート(4)『ブルジョア』

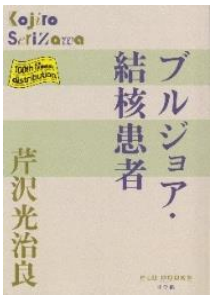
※これらのノートは、財団ホームページ「芹沢文学ガイドとライブラリー」に掲載しています。ご覧ください。



入手可能な「電子書籍一覧」の紹介



『サムライの末裔』
(小学館)



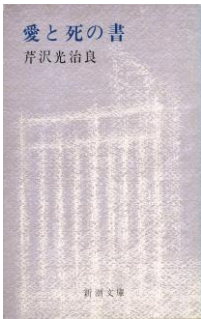
『ブルジョア・結核患者』
(小学館)



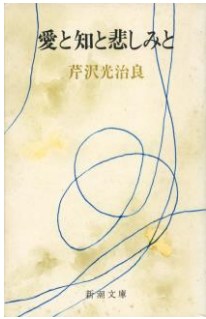
『孤絶』
(小学館)



『神の微笑』
(新潮社)



『愛と死の書』
(新潮社)



『愛と知と悲しみと』
(新潮社)



『離愁』
(KADOKAWA)



『故国』
(KADOKAWA)



『坂の上の家』
(KADOKAWA)



『春の谷間』
(KADOKAWA)

※「芹沢光治良の電子書籍一覧」(BOOK☆WARKER)が掲載されているQRコードです。



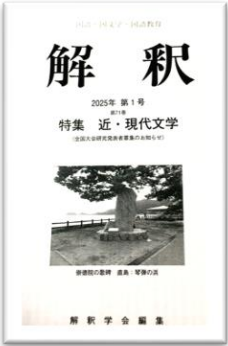
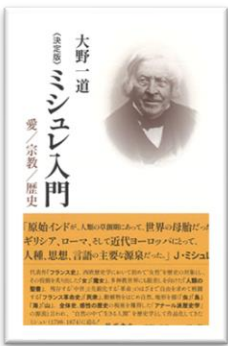
財団に寄贈された図書の紹介

- (決定版)「ミシュレ入門」(藤原書店)
・・愛/宗教/歴史・・
- 「解釈」2025年 第1号(第71巻)
特集 近・現代文学
・「芹沢光治良の恋愛」(その虚と実)

大野一道

解釈学会編集

鈴木吉維



芹沢文学のまわりで シリーズ(7)

野見山恵美子 芹沢光治良記念会(学芸・作品資料)担当

軽井沢の地は、光治良先生にとって特別な場所でありました。その地、軽井沢の文学と芹沢光治良について、大藤敏行様にサロン・マグノリアにて講演をしていただきました。

講演をお願いさせていただいた所以や希望理由は多々あるのですが、その発端の一つに、大藤様が館長をつとめられている館の『軽井沢高原文庫通信』(第103号、2014年6月20日)に掲載された<▼芹沢光治良書簡43通を受贈>という報告記事がありました。<梶川敦子氏(軽井沢町在住)から3月、作家の芹沢光治良から梶川敦子氏宛書簡43通をご寄贈いただきました。封書24通、はがき19通。1941(昭和16)年から1968(昭和43)年までの書簡。梶川氏は東京生まれ。芹沢光治良に師事。(後略)>

梶川敦子さんは、「作家・光治良の弟子」であり、『芹沢光治良の世界』(青弓社、2000年)を執筆されています。この本の「第一章 書簡」では、光治良先生から梶川(旧姓木下)さん宛の封書やはがき(1940年(昭和十五年)9月28日の初めての手紙から、1960年(昭和35年)8月24日まで)計25通が翻刻掲載されています。軽井沢高原文庫に寄贈された書簡の内、この25通も含まれるものと推測されます。その中から、光治良先生の考え方や生き方、人柄が反映されていて印象深い一通(部分)を紹介させていただきます。

昭和16年12月3日

木下敦子様

一日づけのお手紙拝見しました。その前のお手紙も。そして一本ずつのお手紙が貴方という人をはっきり私の前に明らかにしてくれます。だんだん貴方という人がよい貴いものを魂のなかに、宝玉のやうに持ちながら、他人から知られないために、一人で苦しんでいることが、分かかって来ました。その宝石をみがいて、その光で貴方の周囲を明るくできることを信じて、安心して大きな心でいらっしゃい。神様から魂のなかに宝玉を貰って産まれた人間はすくないのです。その宝玉をみがかせるために、神様は貴方を不幸な境遇においたのだと考えられます。ですから、不幸な環境を悲しく考えたり、暗く思ったりせずに、神様の恩寵だと考えて、自分を磨くことに心を向けて下さい。芸術家として自己を育てるのに、この境遇が不幸どころか、幸福だとお考えになれる日が、必ずあります。—後略—

芹沢光治良(傍線は芹沢)

光治良先生にとっての軽井沢について、同書に梶川さんは以下のように書いています。往復書簡はく軽井沢の星野の山荘からの発信が、書簡のハガキの半分以上を占めていました。軽井沢に来ると生き返る気がするという言葉、元気を取り戻したという言葉もしばしば聞かれました。この山荘こそ、芹沢光治良がはじめての懸賞原稿の賞金で建てた、本当に自分の城と実感できる場所だったと思います。木々や草花との語らい、鬱蒼と茂る樹間から臨む澄み切った空、そのすべてが芹沢光治良の精神の糧であつたろうと、軽井沢の冴えわたった空気にふれるたびに実感されるのです。静かな山道を散策しながら芹沢光治良の魂は、スイスに、そして療養生活をともに送った友人たちと祈った雪の聖堂に飛んでいたにちがいありません。彼の祈りの原点は、アルプスの山懷の冷たく澄み切った空気のなかで無心に祈った清烈な時間だったと思います。>

梶川敦子さんにとっても、軽井沢は特別な地であり、一人住まいを始められて20年以上になるそうです。

『編集後記』

財団は、<芹沢文学の作品を後世の人たちに読み継がれていくための財団>の理念で設立されて七年目です。

会員の皆様、この理念を生かせるための良いアイデアがあれば事務局宛にメールください。

●皆様、お近くの図書館で芹沢作品を積極的に借りて、芹沢作品をアピールしましょう。

●**お知り合いの方に会員になっていただくようにお勧めください。**
(会費無料です。財団ホームページより登録できます。)



発行： 一般財団法人 芹沢光治良記念文化財団

〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-3

事務局 池田 三省

メール: serizawa.52@nifty.com

財団ホームページ

URL: <http://serizawa-kojiro.com>